

やましなほんがんにあと 山科本願寺跡の発掘調査

調査期間：令和3年 8月30日（月）～ 9月29日（水）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 山科本願寺跡について

山科本願寺は、文明10年（1478）に浄土真宗中興の祖である蓮如上人により造営が開始された寺内町です。周囲には防御施設として土塁や濠や堀がめぐられ、その中に主要堂舎のある「御本寺」と、有力末寺の坊舎や僧侶などが生活する「内寺内」といった区画が存在し、またその外側には門徒や寺に関わる職人や商人などが生活する「外寺内」と呼ばれる区画が存在していました。しかし、造営から54年後の天文元年（1532）に細川晴元率いる法華宗徒や比叡山延暦寺、近江守護六角氏の連合軍の焼き討ちに遭い、その最後を迎えます。当時の様子については、「寺中広大無辺にして、莊嚴。さながら仏国のごとし」と公家の日記にも書かれるほど繁栄していたようです。現在でも土塁の一部が残っており、特に山科中央公園の土塁は、東西75m、南北60mにわたり、当時の状況をよく留めています。

2 発掘調査について

山科本願寺跡では、数多く調査が行われ、複数の建物や柵、井戸や半地下式の石風呂、園池、山科本願寺造営に関わる整地土のほか、周囲にめぐる土塁や濠、焼き討ちに遭った際の焼土などを確認しています。近年では特に、御影堂や阿弥陀堂などの主要堂舎がある「御本寺」内を中心に、遺跡の遺存状況や様相をより深く知るための「範囲確認調査」を行っています。今回の調査もその一環です。調査地は「御本寺」の北側で、御影堂が想定できる場所にあたります。昨年に引き続き、御影堂の範囲を確認するために、発掘調査（27次調査）を行いました。

3 今回の発掘調査成果

調査では、江戸時代の穴（土坑）や柱穴、江戸時代の茶碗や皿などを確認しました。また少しですが、山科本願寺で使用されていたと思われる土師器皿や播鉢も出土しました。しかし、一番の目的である御影堂に直接関わる遺構や遺物は確認できませんでした。

では、山科本願寺にかかわる遺跡が江戸時代にすべて破壊されたのか？という点、そうでもないようです。もともと古い時期の遺跡があるところに新しく穴を造ると、新しく造った穴には、新しい土器と古い土器が混在してしまうことがあります。今回出土した遺物を丹念に見ていくと、大半が江戸時代のものしか出土しない穴ですが、少しだけ江戸時代のものとは山科本願寺期のものが一緒に入っている穴があることがわかりました。このため、今回の調査範囲内では山科本願寺期の遺跡は存在するものの、他の場所よりもその密度はかなり低いと考えられ、掘削を伴うような土地利用があまり行われていなかったことが明らかになりました。

御影堂は、山科本願寺の造営直後に建立が始まっています。堂の規模は明らかではありませんが、少なくとも七間以上で、これに見合うような広い外陣や施設があったとされています。現在の寺院でも大きな主要堂舎の周りには広い空地が設けられており、今回の調査範囲内で山科本願寺期の遺構がみつめられないことは、その空地部分にあたるためとも考えられます。

実はこのような調査成果は、研究を進めていくうえで、重要な手掛かりになるものです。今後も、未発見の御影堂などの主要堂舎についても検討を重ね、山科本願寺の解明に取り組みたいです。

（奥井智子）



図1 山科本願寺寺域想定図

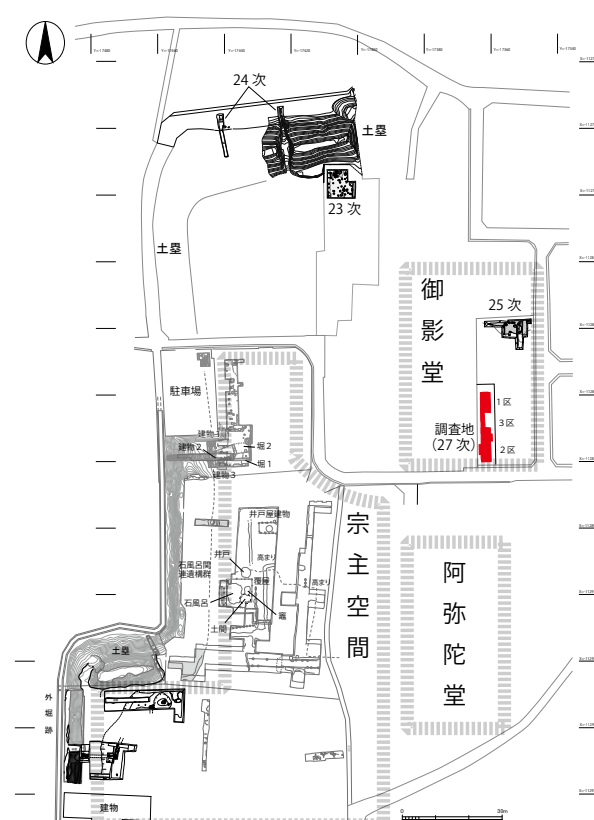


図2 調査地と周辺の発掘調査成果

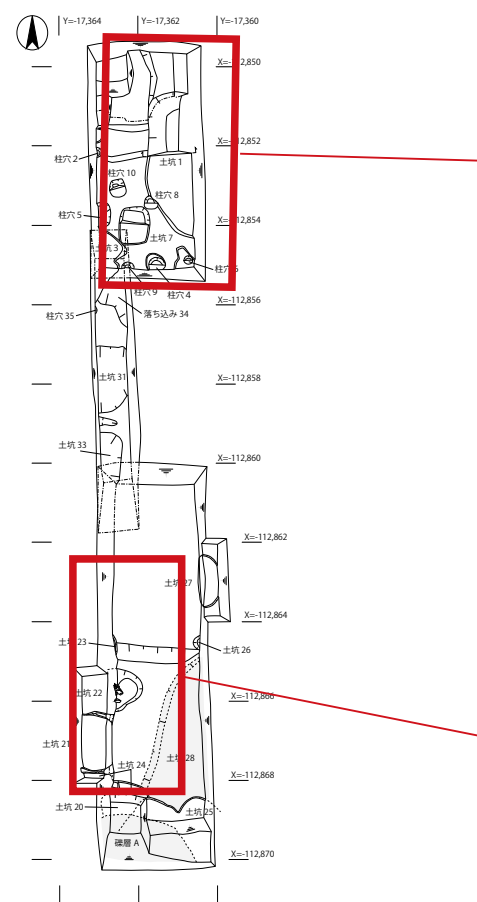


図3 調査区平面図（1/200）



上：1区全体写真（北から） 下：2区西側拡張部分（南東から）